

## 285. 愛知郡秦荘町 高坪山古窯跡採集瓦

### 1. はじめに

愛知川、宇曾川中流域の愛知郡には、依智秦氏に関連するといわれている塔ノ塚廃寺、目加田廃寺、野々目廃寺、小八木廃寺、畑田廃寺などの寺院が白鳳期に多く建立された地として知られ<sup>①</sup>、これまでの発掘調査の成果から多くの研究がなされている。

高坪山古窯跡は、肥沃な湖東平野の北東辺にあたる秦荘町大字常安寺地先に所在する。この平野に対し東西方向に延びる小高い西ヶ丘丘陵縁辺の南東部に数基の窯跡が存在している。分布調査が、昭和50年度に近藤滋氏によって行われ、翌年度に報告されている<sup>②</sup>。調査の原因は、民間開発に伴ったもので、立会調査を実施している。その際、発見された古窯跡で須恵器などが窯跡付近において表面採集されている。このことから、窯の操業期は7世紀前半期と報告されている。これらの須恵器は、上蚊野古墳群など愛知・犬上郡に分布する遺跡を中心に供給していたと考えられている。

### 2. 愛知・犬上郡周辺の古窯跡

愛知・犬上郡周辺の白鳳期前後の窯跡を地理的に北から南に概観してみると、まず彦根市正法寺町所在の鳥籠山遺跡<sup>③</sup>（正法寺瓦窯）が芹川の右岸の鳥籠山の西側山裾に立地する。この遺跡は、竹ノ鼻廃寺などの寺院に供給されていたと推定されている白鳳期～奈良時代の瓦窯である。鳥籠山遺跡から約6.5km南の多賀町榑崎所在の榑崎東遺跡では、白鳳期の軒丸瓦、平瓦、磚が採集され北村氏<sup>④</sup>によって報告されている。榑崎山の北裾部付近という立地から瓦窯の可能性がある。同町富之尾所在の長尾窯跡は、犬上川上流（北谷川）の右岸段丘上に立地し奈良時代の須恵器窯が確認されている。高坪山古窯跡の約2km南西に位置する塔ノ塚廃寺は秦荘町蚊野に所在する。当廃寺の調査から窯跡が2基確認され、1基が瓦窯、もう1基は不明である。当廃寺は、奈良時代前葉から平安時代後期頃まで存続したと報告され<sup>⑤</sup>ている。新池遺跡は、宇曾川上流左岸にあたる湖東町平柳に所在し、押立山の西側山裾に立地し、須恵器が採集され祇園古墳群、祇園東古墳群に供給したと考えられる須恵器窯跡が確認されている。横溝遺跡は、同町横溝に所在し『近江愛智郡志』<sup>⑥</sup>によれ



第1図 周辺遺跡位置図

1. 鳥籠山遺跡
2. 長尾窯跡
3. 榑崎東遺跡
4. 高坪山窯跡
5. 塔ノ塚廃寺
6. 新池遺跡
7. 横溝遺跡
8. 大覚寺田遺跡
9. 坊主谷遺跡





第2図 高坪山古窯跡立地図

ば、軒丸瓦が採集されており瓦窯が存在したと推定されている。愛知川の支流である棚上川上流の右岸には、愛東町下中野所在の大覚寺田遺跡<sup>⑧</sup>、同町園所在の坊主谷遺跡が存在する。大覚寺田遺跡では、確認された窯跡が6基あり、その内の1基から瓦片が採集されており瓦窯の存在が示唆され、これらの窯跡は奈良時代中期～後期に比定されている。坊主谷遺跡では、『近江愛智郡志』によると布目瓦が採集されていることから瓦窯が存在したと推定されている。

### 3. 高坪山古窯跡の遺物について

今回紹介する資料は、昭和50年度に行われた滋賀県教育委員会の調査ののち、秦荘町教育委員会の林定信氏に実見させて頂いた資料である。氏によると、「今から10年程前に、図2の埋蔵文化財包蔵地のうち、丘陵東南部の崖面●印の場所において、地元中学生が、崖から崩れ落ちた灰原層の土に混じって瓦を発見した。」と出土状況の説明を頂いた。現在、遺物は秦荘町歴史文化資料館にて保管されている。これらの高坪山古窯跡から発見されている遺物から古窯跡の位置付けについて、若干の考察を行ってみる。ここでは、拓本、実測可能なものを図化した。

#### (1) 平瓦

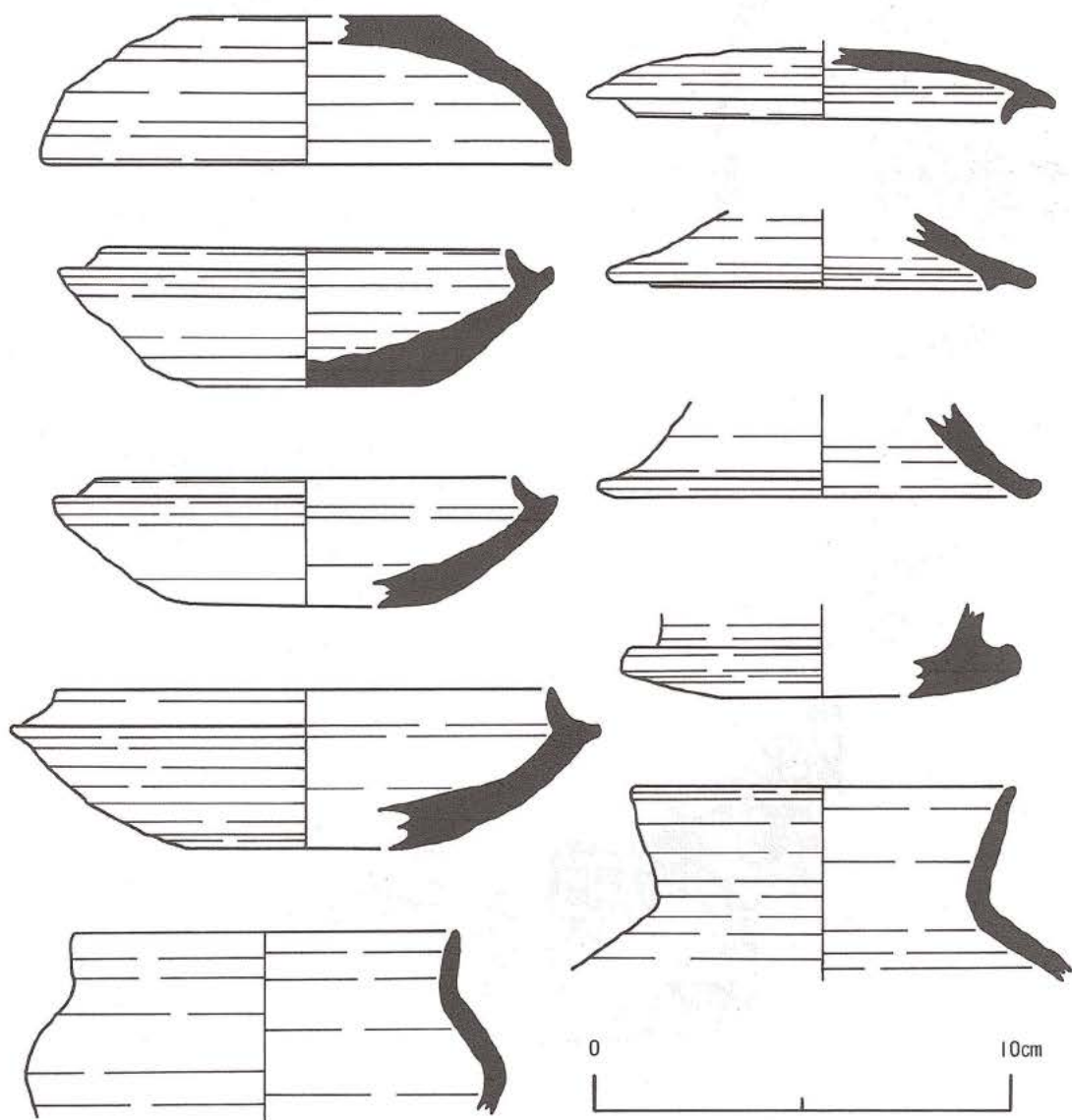
平瓦は、大きく2種類に分類できる。I類は、砂粒・小石を含むやや粗い胎土をもち、軟質で色調は褐色を呈す。I類は、1、2、3、6、8の平瓦である。1は、広端面の厚みが約2.2cmを測る。凸面には、若干斜

格子タタキの痕跡が残る。凹面には、明瞭ではないが布目痕跡が残る。側面には、外面にのみ一度ヘラ削りを施す<sup>⑨</sup>(b)。2は、瓦中央部の厚みが約2.5～3.0cm、広端面では約1.3cmを測る。凹面には、布の綴じ目及び糸切り痕跡が残る。側面には、外面にのみ一度ヘラ削りを施す(b)。3は、広端面の厚みが約2.1～2.5cmを測る。凹面には、桶巻作りを示す分割突帯の痕跡、及び模骨痕跡が端に残る。6は、広端面の厚みが約2.1cmを測る。凸面には、図面では明確ではないが斜格子タタキ痕跡が確認できる。凹面には布の綴じ目、模骨痕跡、分割突帯の痕跡が残る。側面には、外面に一度ヘラ削りを施し、端部を丸く収めている(c)。8は、側面の厚みが約2.2cmを測り、胎土はやや粗く2mm角の小石を若干含む。凹面には、粘土の継ぎ目が断面にまで明確に残り、分割突帯がみられる。側面には、ヘラ削りを施さない(a)。

II類は、7の平瓦のみである。端面の厚みが約1.3cmを測り、胎土はやや粗く、2mm角の小石を含む。焼成が良好で硬質。色調は暗灰色を呈する。側面には、内面にのみ一度ヘラ削りを施す(d)。基本的に上記の2種類の平瓦は、凸面に模骨痕跡、布の綴じ合わせ痕跡、粘土板の継ぎ合わせ目、分割突帯が残ることから粘土板桶巻き作りで製作されていると考えられる<sup>⑩</sup>。

#### (2) 丸瓦

丸瓦は5、9である。砂粒・小石を含むやや粗い胎土をもち、焼成は不良のため軟質で、色調は淡灰褐色



第3図 昭和50年度採集須恵器（註2の文献より）

を呈す。凹面には、布目痕跡及び、布の綴じ合わせ目の痕跡が残るが、内外面かなり摩滅している。5は狭端面中央の厚みが約1.3cmを測る。9は端面の厚みが約1.5cmを測る。

### (3) 道具瓦

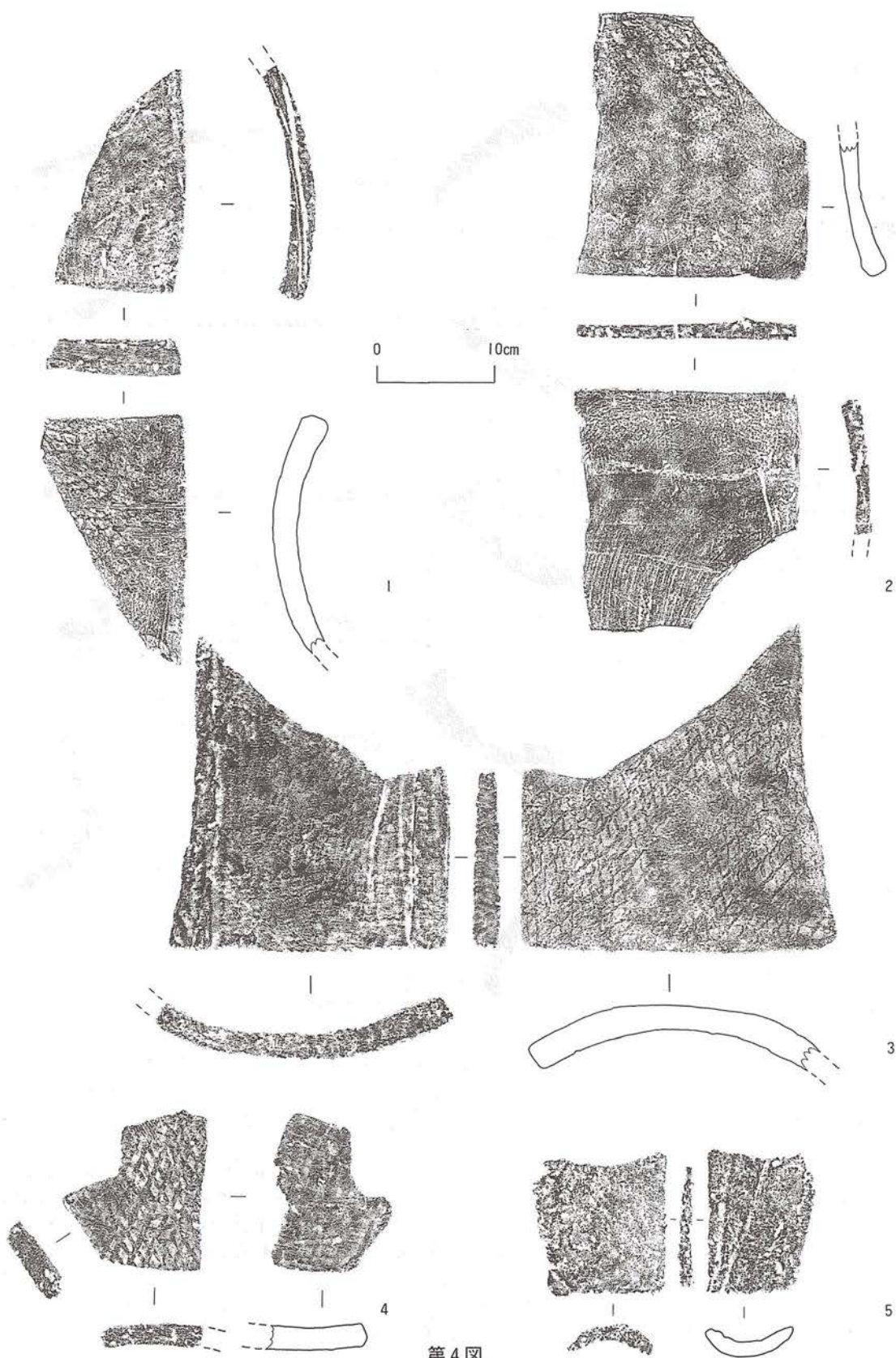
道具瓦は4である。成形・調整後の平瓦を利用し、L字に隅切りを施した隅平瓦である。90°～115°の隅角を持つ。砂粒・小石を含むやや粗い胎土をもち、焼成は不良のため軟質で、色調は表面は褐色であるが、断面は生焼けのため淡灰色を呈する。厚みが約2.0cmを測

る。側面には、外面にのみ一度ヘラ削りを施す（b）。

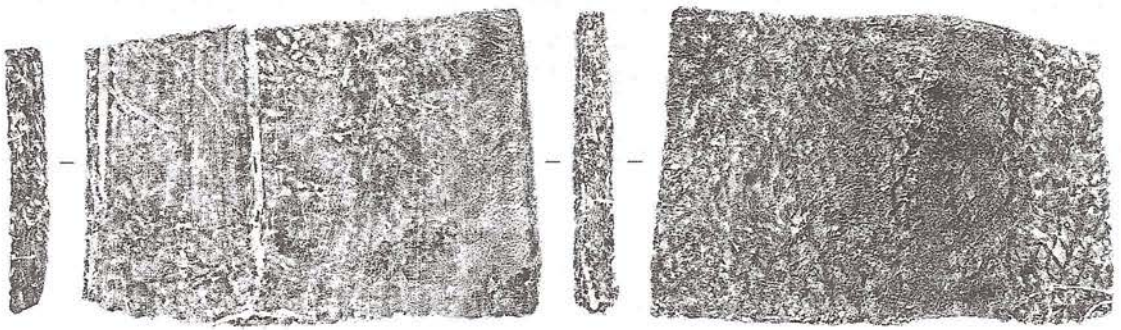
### 4. まとめ

湖東地域には、湖東式軒丸瓦という特徴的な瓦がある<sup>⑧</sup>。この瓦は、単弁八葉蓮華文で中房に大きな蓮子を一個つけその外側に蓮子をめぐらし、さらに外区内縁に珠文をもつ。この軒丸瓦に組み合う指頭圧痕をつけた重弧文軒平瓦からみて、一般的に7世紀第4四半期と考えられている。しかし、採集されている遺物のうち大半が平瓦であり、湖東地域特有の軒丸瓦及び重弧文をもつ軒平瓦は発見されていない。

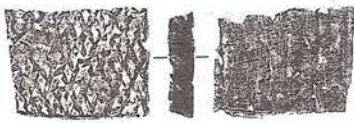




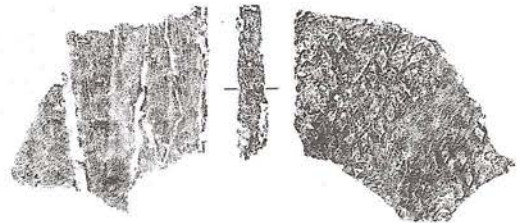
第4図



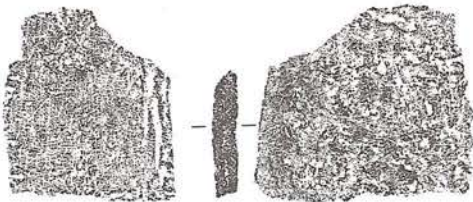
6



7



8



9

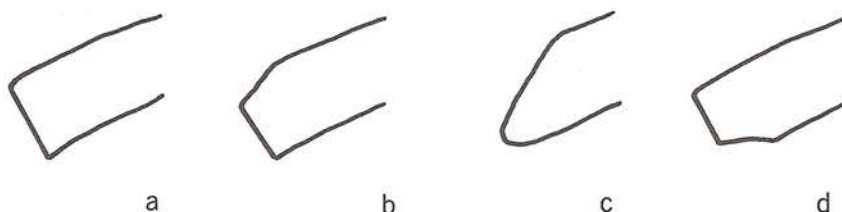


第5図



図版番号	種 別	凸 面 調 整	凸面タタキ 一辺の計測値(cm)	凹面調整	凹面布目の1cm あたりの計測値 縦方向 横方向	側面端部 調 整	色 調	焼 成
1.	平 瓦	斜格子タタキ後横ナデ消し	0.9~1.0	布目痕	9 × 9	b	淡 褐 色	やや不良
2.	平 瓦	斜格子タタキ	0.9~1.2	布目痕	10 × 10	b	褐 色	やや不良
3.	平 瓦	斜格子タタキ	0.8	布目痕	8 × 8	a	灰 褐 色	良 好
4.	隅平瓦	斜格子タタキ	0.8	布目痕	9 × 9	b	褐 色	不 良
5.	丸 瓦	摩 滅	—	布目痕	摩 滅	—	淡灰褐色	不 良
6.	平 瓦	斜格子タタキ	0.9~1.2	布目痕	8 × 8	c	褐 色	良 好
7.	平 瓦	斜格子タタキ	0.8	布目痕	10 × 10	d	暗青灰色	良 好
8.	平 瓦	斜格子タタキ	0.8~1.0	布目痕	8 × 8	a	褐 色	不 良
9.	丸 瓦	摩 滅	—	布目痕	摩 滅	—	淡白褐色	不 良

第1表 出土瓦分類表



第6図 側面端部分類模式図

今回、提示した高坪山古窯跡の平瓦は、凸面に模骨痕跡、布の綴じ合わせ跡、粘土板の継ぎ合わせ目、分割突帯が残ることから粘土板桶巻き作りで製作されている。これまで報告されている高坪山古窯跡の遺物は、須恵器の壺、杯、高杯、短頸壺、直口壺などであった。これらの須恵器から、陶邑編年のTK209型式~TK46型式までの3型式<sup>⑧</sup>など先学の研究<sup>⑨</sup>によって、当窯は7世紀前葉に須恵器窯として操業を始めたと考えられ、白鳳期に至りこの丘陵を利用して瓦生産を行ったと考えられている。白鳳期から奈良時代における当地域東方、鈴鹿山系からの丘陵や山裾を利用した高坪山古窯跡などの窯跡で生産された瓦は、主に湖東北地域のいずれかの寺院に葺くことを目的に生産されていると推測される。そのうち現段階で生産地と供給先が明確に示唆されているのは、塔ノ塚瓦窯から塔ノ塚廃寺と、正法寺瓦窯から竹ノ鼻廃寺への2か所だけである。

高坪山古窯跡の遺物の検討から、操業期の須恵器生産、そして寺院造営に掛かる瓦生産技術の導入により新たな技術伝播を想定できる。当地支配者による古墳築造に掛かる強いエネルギーが継続し、寺院造営へ転換<sup>⑩</sup>していく時代の変化という問題の一端を示す資料と考えられ、この事に関しては今後の課題としたい。

最後に、小文を作成するにあたり林定信、重岡卓、西村匡広の三氏をはじめ、北村圭弘、角健一、高橋学、細川修平、仲川靖、畑中英二、林純、藤崎高志の諸氏に貴重なご助言を賜った。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

(竹村吉史)

#### 註

- ①小笠原好彦「近江の仏教文化」『古代を考える・近江』吉川弘文館 1992
- ②近藤 滋・松沢 修「愛知郡秦荘町高坪山古窯跡調査報告」『滋賀県文化財調査年報（五十年度）』滋賀県教育委員会 1977
- ③本多修平「鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書」『彦根市埋蔵文化財調査報告書』第23集 彦根市教育委員会 1992
- ④北村圭弘「近江の古代寺院研究の基礎資料Ⅳ」『滋賀文化財だより』No. 193 滋賀県文化財保護協会 1994
- ⑤葛野泰樹「愛知郡秦荘町軽野遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X-1』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1983
- ⑥中川泉三編「飛鳥朝奈良朝時代の仏教文化」『近江愛知郡志』第1巻 愛知郡教育会 P160~179 1929
- ⑦大崎哲人「滋賀県における古代窯業生産の展開」『史想』第21号 京都教育大学考古学研究会 1988
- ⑧田路正幸・細川修平「愛知郡愛東町内埋蔵文化財詳細分布調査報告書」愛東町教育委員会 1987
- ⑨重岡 卓「田原道をめぐる二つの地域」『紀要』9号 滋賀県文化財保護協会 1996。本稿を参考に分類を行った。
- ⑩佐原 真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻 第2号 1972
- ⑪重岡 卓「湖東系軒瓦」に関する基礎的考察 — 「湖東系軒瓦」に見る湖東北半 — 『紀要』第10号 滋賀県文化財保護協会 1997
- ⑫林 純「近江における古墳時代須恵器生産の特質」『滋賀考古』第6号 滋賀考古学研究会 1991
- ⑬角 健一「古墳時代における須恵器変遷とその背景」『考古学雑誌』第83巻第2号 1998
- ⑭畑中英二「滋賀県下における手工業生産 — 7世紀後半の様相を中心に — 」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会 1995
- ⑮平井美典「滋賀県犬上川左岸群集墳と貫泰画師氏」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994
- ⑯伊達宗泰「古墳・寺・氏族」『末永先生古稀記念古代学論叢』古代学論叢刊行会 1967